

近藤俊太郎著

『天皇制国家と「精神主義」』

——清沢満之とその門下——

(日本仏教史研究叢書)

法蔵館 二〇一三・六刊
四六 二五〇頁 二八〇〇円

本書は、清沢満之(一八六三—一九〇三)とその門下が展開した「精神主義」運動に焦点を当て、その全体像を明らかにした研究書である。清沢は日露戦争を前にして一九〇三年六月に没するが、彼の下で信仰を形成した暁烏敏・佐々木月樵・多田鼎・楠(和田)龍造・近藤純悟・安藤州一・曾我量深・金子大栄・山辺習字・赤沼智善といった仏教知識人たちは、一九一九年まで機関誌『精神界』の発行を続け、清沢の「精神主義」に基づく仏教運動を展開した。本書は、同誌の論説をもとに「精神主義」運動の内容を詳細に分析し、これを近代日本の歴史状況のなかに位置づけることを試みたものである。

著者はまず、従来の清沢研究では「精神主義」と天皇制国家との関係が問われなかったと指摘し、『精神界』誌上に記された清沢の信仰とその政治的立場を検討する(第一章)。「如来」への信仰を絶対視した清沢は、事実よりも信仰を、人間の外面よりも内面を重視すべきことを説いたが、そこには現実世界に対する責任意識が欠落しており、天皇制国家との緊張関係が成立する余地はな

かったという。こうした清沢理解は、第二章以下で著者が「精神主義」運動の特質を解き明かしていくうえでのキーポイントとなっている。

続いて、足尾鉍毒事件(第二章)、日露戦争(第三章)、「大逆」事件(第四章)、三教会同と明治天皇死去(第五章)といった歴史的事件に対して、清沢門下がいかなる対応をとったかが明らかにされる。ここでの著者の問題意識は、天皇制国家の現実に対して「精神主義」はいかなる批判意識をもちえたのか(もちえなかったのか)、という点に集中している。例えば第三章では、『精神界』同人が日露戦争を自己の信仰確立の好機として捉えた結果、戦争を否定する契機をもちえなかったことが、『平民新聞』との対比によって明らかにされる。そのうえで、著者は、「精神主義」運動が「天皇制国家の宗教的基盤に対する原理的な緊張関係を確認できず、みずからとの異質性を自覚的に問題化しえない要因は、運動を担った人々の信仰に伏在していた」(一一八—一九頁)と指摘する。仏教知識人の国家に対する従属を単に曝露するのではなく、それを仏教信仰との関係から内在的に説明しようとした点に、本書の特徴があるといえるだろう。これらの議論を踏まえて、著者は暁烏敏・金子大栄の論説を取り上げ、十五年戦争期における「精神主義」の戦争協力・神仏関係論について論じている(第六章)。

以上のように、天皇制国家との関係を通じて「精神主義」運動の全体像を描いた本書は、仏教史としてはもちろん、政治思想史の著作としても十分に読み応えあるものとなっている。今後の展開に期待したい。

(佐々木政文)